

# 北陸自動車道関係発掘調査報告書

獅子沢遺跡

1996

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 北陸自動車道関係発掘調査報告書

し 獅 子 沢 遺 跡

1996

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

新潟市を起点とし、日本海側の新潟・富山・石川・福井の各県を通り、滋賀県米原町までを結ぶ北陸自動車道は、ほぼ全線開通し、残すところ新潟亀田インターチェンジと新潟東インターチェンジ(仮称)間のみとなっています。すでに新潟亀田インターチェンジまでは開通し、日本海側の社会・経済等の発展に大きく貢献しています。さらに、新潟東インターチェンジ(仮称)まで開通すると、今後計画されている日本海沿岸東北自動車道と連結することになり、これまで以上に、北陸自動車道の利用拡大が図れるものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和47年以来今日まで北陸自動車道建設にかかる遺跡の発掘調査を行ってきました。

本書は、新潟亀田インターチェンジから新潟東インターチェンジ間の盛り土採取用地決定に伴って実施した安田町所在の「獅子沢遺跡」の調査報告書です。

調査の結果、集落等の痕跡は明らかにすることはできませんでしたが、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺物や旧石器時代の遺物がわずかながら発見されています。安田町周辺には縄文時代の遺跡は数多くありますが、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺跡は数える程しかありません。さらに、今までわかっている遺跡はほとんど墳墓で、本遺跡とは性格を異にしております。これらの遺跡を総合的に考えることによって、この地域の縄文時代晩期から弥生時代中期の生活空間が一層明らかになるものと思われます。旧石器時代の遺物は、本遺跡の南側で発掘調査された円山遺跡と関係するものと考えられます。

本書が、今後の本県における縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての歴史研究に多少なりとも寄与するところがあれば幸いです。

最後に、本調査を進めるにあたって多大なご協力とご援助を賜った地元の方々、ならびに日本道路公団新潟建設局・同新潟工事事務所をはじめ、安田町教育委員会に対して厚く御礼申し上げます。

平成8年12月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

## 例　　言

1. 本報告書は新潟県北蒲原郡安田町大字六野瀬字獅子沢1840ほかに所在する獅子沢遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は北陸自動車道建設のための土取り工事に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 発掘調査は新潟県教育委員会(以下、県教委と略す)が調査主体となり、平成7年度に実施した。なお、発掘調査については、県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団と略す)に調査を委託した。
3. 整理および報告書にかかる作業は平成7年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
4. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管している。遺物の証記記号は獅子沢遺跡を「シシ」として出土地点を併記した。なお、出土した層位とレベル値は別に一括し、記録・保存してある。
5. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の図面を使用したものについては、それぞれにその出典を記した。
6. 遺物番号は通し番号とし、文章および実測図・写真図版の番号は一致している。
7. 引用・参考文献は著者および発行年(西暦)を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
8. 本書の作成は、藤巻止信(埋文事業団調査課第一係長)の指導のもとに、菅井良咲(同主任調査員)が担当した。報告書の執筆は菅井と村山良紀(同嘱託員)があたった。執筆分担は第Ⅱ章が村山、それ以外は菅井である。なお本書の編集は菅井が行った。
9. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を賜った。厚くお礼申し上げる。(敬称略・五十音順)  
阿部朝樹、荒木繁雄、諫山えりか、渋谷孝雄、白石典之、菅沼　亘、高橋春栄、滝沢規朗、福田仁史、増子正三、安田町教育委員会

# 目 次

第 I 章 序 説 .....	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査体制と整理作業	
A. 調査体制	
B. 整理作業および報告	
第 II 章 遺跡の位置と環境 .....	3
1. はじめに	
2. 地理的環境	
3. 歴史的環境	
第 III 章 調査の概要 .....	7
1. 第一次調査	
2. 第二次調査	
A. 調査方法	
B. グリッドの設定	
C. 調査経過	
第 IV 章 遺跡 .....	10
1. 概観	
2. 層序	
3. 遺構各説	

- A. 土 坑
- B. 掘立柱遺物跡
- C. ピット

#### 4. 出土遺物

- A 土 器
- B 石 器

### 第 V 章 自然科学の分析調査 ..... 19

#### 1. はじめに

#### 2. 資料と方法

#### 3. 測定結果

- A.  $^{14}\text{C}$  年代測定値
- B.  $\delta^{13}\text{C}$  測定値
- C. 補正  $^{14}\text{C}$  年代値
- D. 歴年代

### 第 VI 章 まとめ ..... 21

#### 1. 遺構について

#### 2. 遺物について

#### 3. $^{14}\text{C}$ 年代測定の結果について

### 《要約》 ..... 23

### 《引用・参考文献》 ..... 24

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の地形分類図	4
第2図 獅子沢遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第3図 第一次調査位置図	7
第4図 グリッド設定図	8
第5図 土層柱状図	11

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧	6
第2表 土器観察表	18
第3表 石器観察表	18

## 図 版 目 次

### 図 面

- 図版1 調査区全体図・遺物出土状況図
- 図版2 遺構個別実測図(1・2号土坑・掘立柱建物跡)
- 図版3 遺物実測図(土器1)
- 図版4 遺物実測図(土器2・石器1)
- 図版5 遺物実測図(石器2)

### 写 真

- 図版6 1. 遺跡遠景(南から) 2. 遺跡遠景(北から) 3・4. 作業風景
- 図版7 1. 遺跡完掘全景(南から) 2. 遺跡完掘全景(空撮) 3. 1号土坑土層断面 4. 1号土坑完掘
- 図版8 1. 遺物出土状況 2. 2号土坑土層断面 3. 2号土坑完掘 4. 1・2号土坑、ピット1・2全体  
5. 掘立柱建物跡 6. 南北土層断面 7. 東西土層断面
- 図版9 山上遺物(土器)
- 図版10 出土遺物(石器)

# 第一章 序 説

## 1. 調査に至る経緯

北陸自動車道は総延長488kmに及ぶもので、起点を新潟市におき、日本海沿岸の富山・石川・福井の各県を経由し滋賀県米原町で名神高速道に接続する一方、今後建設が計画されている日本海沿岸東北自動車道にも連結する一大高速自動車道である。この路線は北陸各県の主要都市を連結し、さらに関西方面と東北方面を直結させるものであり、関連する地区はもとより、地域の開発促進に関わる重要な役割を担っている。

北陸自動車道のうち、新潟西ICから新潟亀田ICまでは平成6年に開通し、残る新潟亀田ICから新潟東IC(仮称)間、約6.4kmの建設が、第11次施工区間として平成6年から本格的に開始された。平成5年9月、その建設盛土として北蒲原郡安田町大字六野瀬地内から土取りするため、日本道路公団(以下、公団と略す)は「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」記3(1)に基づき、県教委に北陸自動車道に伴う安田土取り場に関する埋蔵文化財分布調査を依頼してきた。県教委はこれを受け、同年10月埋文事業団に分布調査の実施を委託した。

埋文事業団は、平成5年11月4・5日に安田町大字六野瀬地内土取り場対象地の分布調査を行い、同月その結果を県教委に報告した。現況が山林のため、十分な報告内容とは言えず、一次調査が必要な地域の確定にまでは至らなかった。再度分布調査を実施して一次調査範囲を確定する必要がある旨を伝達した。

平成6年3月、県教委と公団との協議の結果、再度分布調査を実施することが決定し、同月県教委からの委託を受けて、埋文事業団が分布調査を実施した。前回の調査時に十分確認できなかった進入路にかかる地域と土取り場本体部分の谷筋、および斜面部の踏面に主眼を置いて行われた。この結果、一次調査が必要とされる範囲として、平坦部約21,800m<sup>2</sup>、斜面部を含む谷筋約22,700m<sup>2</sup>、計約44,500m<sup>2</sup>の面積を報告した。

平成6年9月、公団から平成6年度埋蔵文化財発掘調査の追加依頼が「安田土取場地内遺跡」として県教委に提出された。11月に公団・県教委と協議した結果、11月から一次調査が実施できる旨を回答した。一次調査は、平成6年11月28日から12月15日までと平成7年3月13日から15日までの2回と平成7年9月18日から9月29日までの磁気探査による調査を実施した。以下、獅子沢遺跡に関わる一次調査についてのみ記す。

平成7年3月、安田町大字六野瀬字獅子沢地内の一次調査を実施した結果、2カ所のトレンチから土器片が出土したため、その周辺の緩斜面部約580m<sup>2</sup>の範囲で二次調査を行う必要があることが判明した。県教委はその旨を公団に伝えるとともに、新発見であるこの遺跡について「獅子沢遺跡」と称し、文化庁に遺跡発見通知を提出した。

公団と協議を重ねた上、平成7年9月に獅子沢遺跡の二次調査を実施することに決定し、県教委から委託を受けた埋文事業団がこの調査にあたった。

## 2. 調査体制と整理作業

発掘調査は県教委から委託を受けた埋文事業団が下記の体制で実施した。なお、一次調査については獅子沢遺跡に関わる調査のみを記載する。

### A. 調査体制

#### [第一次調査]

調査期間 平成7年3月13日～3月15日  
調査主体 新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)  
調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)  
管 理 藍原直木(専務理事・事務局長)  
 渡辺耕吉(総務課長)  
 茂田井信彦(調査課長)  
調査指導 藤巻正信(調査課調査第一係長)  
調査担当 沢田 敦(同 文化財調査員)  
調査職員 荒川隆史(同 文化財調査員)  
庶 務 泉田 誠(総務課土事)

#### [第二次調査]

調査期間 平成7年9月12日～10月3日  
調査主体 新潟県教育委員会(教育長 平野清明)  
調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 平野清明)  
管 理 藍原直木(専務理事・事務局長)  
 山上利雄(総務課長)  
 魚井 功(調査課長)  
調査指導 藤巻正信(調査課調査第一係長)  
調査担当 高橋保雄(同 土任調査員)  
調査職員 菅井良暉(同 土任調査員)  
庶 務 泉田 誠(総務課土事)

### B. 整理作業および報告

平成7年12月11日から平成8年3月31日までの間、埋文事業団曾和分室(以下、曾和分室と略す)において本報告書作成に関わる整理作業等を行った。

遺物の復元・実測・写真撮影・図版作成等の主要な作業は、菅井(埋文事業団主任調査員)を中心に山田昇(同嘱託員)、村山良紀(同嘱託員)がこれにあたった。主な分担は下記の通りである。

- 遺物の整理・復元 …… 山田・村山
- 遺物の実測・トレース …… 村山
- 遺物の写真撮影 …… 山田
- 図版の作成 …… 菅井・山田

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1. はじめに

新潟県北蒲原郡安田町は、新潟市の南東約20kmに位置する。南には蒲原山地が位置し、西側に新津丘陵、北側には飯豊山地が連なっている。町の南には、福島県の阿賀川を源とし、多くの支流を集めた阿賀野川が日本海へと流れている。安田町は、北に水原町・笛神村、東に東蒲原郡三川村、南に五泉市、西に新津市と隣接しており、笛神丘陵の西側半分、通称五頭丘陵と越後平野の接点に位置し、面積40.76km<sup>2</sup>、人口約10,500人の町である。

農業を主産業とする当町は、明治の末頃までは村松街道の宿場町、また阿賀野川水運の要地として発展してきた。明治時代に始まった酪農も近年定着し、新潟県の酪農発祥の地として知られている。工業では、宝珠山麓から良質の粘土が採れるため古くから窯業が盛んで、江戸時代末期から始まった瓦の生産が隆盛をきわめ、「安田瓦」として全国に出荷されてきた。しかし、現在は新建材等の出現によって以前はどの状況はみられなくなった[本間1994]。1968年に低開発地域工業開発地区に指定されたのを機に、工場の誘致が行われ、その後の道路網の発達により、工業の発展もめざましく、新しい町づくりが行われている。

### 2. 地理的環境

獅子沢遺跡は、安田町の南東、南北に連なる笛神丘陵の南端に位置している。周辺の地形は、山地・丘陵・段丘・平地・扇状地の5つに分類できる。遺跡のすぐ東に五頭連峰に属する宝珠山(標高559m)などの山々がそびえている。約1km南には阿賀野川が流れ、西にはその阿賀野川が作り出した沖積平野の越後平野が広がる。周辺には、五頭連峰から流れ出る小河川やこれが作り出した扇状地、笛神丘陵に属する起伏量100m以下の小丘陵がいくつもあり、そこには遺跡が数多く存在する。獅子沢遺跡の南側には円山遺跡が隣接しており、また丘陵の南端には六野瀬遺跡や萩野遺跡などが存在している。

遺跡の東にそびえる五頭連峰は東斜面が短く急傾斜であるのに対し、獅子沢遺跡から望む西斜面はやや長く、比較的緩やかな傾斜となっている。このような斜面の違いは第4紀以降の急激な傾動運動の表れである[鈴木1983]。この山地の特徴は、山塊が白亜紀の斑状花崗岩からなり、それには著しい風化が認められることから、崩壊地形が無数に分布することで、あらゆる斜面に崩壊地形がみられる。1967年8月28日の羽越豪雨によって、斜面のいたる所で崩壊を生じ、これが新たに谷底堆積物に加えられて土石流となり、安田町・笛神村に大きな被害を与えたことは記憶に新しい。このような土石流が五頭連峰ではしばしばくり返ってきたことが、笛神丘陵に残有する巨大角礫層の存在からも裏づけられている[高浜・野崎1981]。そうした土石流の堆積は、ツバク扇状地に立地するツバク遺跡にも認められている。

五頭連峰の西麓には、北北東—南南西方向に新発田一小出地質構造線[山下1970]が走っている。中新世以降、新発田一小出地質構造線の活動によって、五頭連峰は断続的に隆起運動を続け、山麓に沿う凹地帯(村杉低地帯)の西側には、比高100m以下の分離丘陵が延長20km、幅1~2kmにわたって形成され、さらに



第1図 遺跡周辺の地形分類図

土壤分類基本調査図「津川」(新津) (1983)より作成

丘陵は、五頭連峰から流れ出る河川によって分断されている。五頭山地の隆起運動の顕著な活動期は2回認められており、最初は中新世末～鮮新世初頭に、五頭山地側が著しい隆起運動を、次いで中期更新世に再びその東側地域の著しい隆起によって、現在の五頭山地が形成され、越後平野との地形的な対立を明確にしたものと考えられている（高浜・野崎1981）。

このようにして形成された笛神丘陵は新第三紀中新世・鮮新世の堆積岩層を不整合に被り第四系からなり、西へ傾く単斜構造をなしている。第四系のうち、更新世前・中期と考えられている笛神層は堆積面を残しておらず、土石流堆積物および段丘堆積物が平坦面を残している（笛神団体研究グループ1982）。

### 3. 歴史的環境

安田町周辺では、平野・扇状地・丘陵上に多数の遺跡の存在が報告されている。かなり早い時期から調査が行われていた遺跡も多い。報告されている遺跡の中では縄文時代に所属する遺跡が数多く、また、縄文時代晩期から弥生時代中期に所属する墳墓等の貴重な資料が報告されている。なお、獅子沢遺跡は、平成6年に報告書が刊行された萩野遺跡・官林遺跡と隣接しており、第Ⅱ章において内容が重複する部分が多い。このため、詳細は越越自動車道関係発掘調査報告書である『萩野遺跡・官林遺跡』（亀井ほか1994）の第Ⅱ章に譲り、本書には、当遺跡と時代をほぼ共にする周辺の主な遺跡を挙げる。

六野瀬遺跡は、獅子沢遺跡の南西約1km、阿賀野川の河岸に面する丘陵上に立地し、標高は約22mを測る。1938年に杉原莊介、乙益重隆らにより発掘調査が行われた。一次的に埋葬された人骨一体と土器棺5基が発見され、再葬墓を中心とした遺跡と判明した。その後1983年・1988年・1990年に発掘調査が行われた。出土した遺物の大半は縄文時代晩期の鳥屋2b式土器で、同時期の石錐や石錐も多い（石川1992）。

藤堂遺跡は、安田町北部の段丘先端部の緩傾斜地に立地し、標高は約23mを測る。1971年と1973年に発掘調査が行われた。縄文時代後期後葉の竪穴住居跡が4軒発見されており、1979年に発掘調査された中道遺跡の集落跡とともに大集落を形成していたと思われる。出土遺物は縄文時代後葉～末期の塔ヶ峰式などの瘤付き土器に特徴がある。石器や土製品の出土も多い（本間1974）。

ツベタ遺跡は、安田町の北東のツベタ扇状地上に立地し、標高は約70mを測る。縄文時代中期と後期の包含層の間に約2mの十石流の堆積層がある。1886年に吉田東伍により発見され、県内でも最も早くから存在が知られていた遺跡である。1963年・1972年・1982年の調査の結果、縄文時代中期の馬高式土器、後期の三十石場式土器、その他土製品や石器などが出土している。また、三十石場式土器が埋設された石碑も発見されている（間ほか1972）。なお、ツベタ遺跡の調査はその後も行われている。

横峯遺跡は、安田町北部の丘陵上に立地し、標高は約25mを測る。発掘調査は1974年と1975年に行われた。横峯A遺跡は、縄文時代後期～弥生時代後期に断続的に営まれたと考えられ、縄文時代晩期の住居跡1基が発見された。横峯B遺跡からは、縄文時代中期の住居跡15基、土坑4基、晩期の土坑1基、平安時代の住居跡2基が発見されている（川上ほか1981）。また、平安時代末期～鎌倉時代初頭の経塚2基が発見されているが、これは1975年発掘の横峯経塚群として知られている（川上1979）。

この他、中世までの各時代の調査例が数遺跡報告されている。旧石器時代の石器が多数出土した円山遺跡、弥生時代の再葬墓群が発見された大曲遺跡、須恵器の壺と蓋・羽口や鉄斧等が採集されている不動院遺跡などである。各時代ごとの発掘調査は行われていないが、調査された遺跡は貴重な資料を提供している（本間1994）。今後調査が進むことによって、この地域の歴史がさらに明らかになるものと考えられる。

### 3. 歴史的環境



第2図 獅子沢遺跡の位置と周辺の遺跡  
国土整理院発行「1:25,000地形図  
「新津」「村松」「出澤」「栗下」(平成2年)を使用

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	寒浦B	中世	13	山ノ下	绳文(中・後期)	25	日陰平	绳文	37	官林	绳文(中期)
2	寒浦A	平安	14	上野林D	绳文(中期)	26	八百刈	平安	38	赤坂山B	绳文(中・晚期)
3	花田	平安	15	横峯	绳文(中・後・晚期)	27	高塙敷	绳文	39	赤坂山	绳文(中・晚期)
4	小山崎	绳文(後期)	16	上野林A	绳文(中期)	28	山下A	弥生(中期)	40	六野瀬	绳文(前・中期)
5	行塚	绳文(中期)	17	冰巖	绳文	29	吉ヶ浜平	绳文	41	猿場赤坂A	绳文
6	中瀬	绳文(中・後期)	18	家添	绳文	30	保田耕削	绳文	42	馬下福桑	绳文(後期)
7	上野林B	绳文(中期)	19	石仏野	先史器	31	野中	绳文(中・後期)	43	馬下	绳文
8	一本松	绳文	20	瀧山	中世	32	耕削	绳文(中期)	44	翁神	绳文
9	毛城山	绳文	21	八日ヶ原B	绳文(中期)	33	平鶴城	绳文・平安	45	小栗山	绳文(中期)
10	上野林C	绳文(中期)	22	宮ノ越	平安	34	勝子川	绳文(晚期)、弥生	46	切畠	绳文(中期)
11	蘿鬼	绳文(中・後期)	23	露盤田	古墳	35	円山	旧石器			
12	人曲	弥生(中期)	24	ツバケ	绳文(中・後期)	36	森野	绳文(中・後期)			

第1表 周辺の遺跡一覧

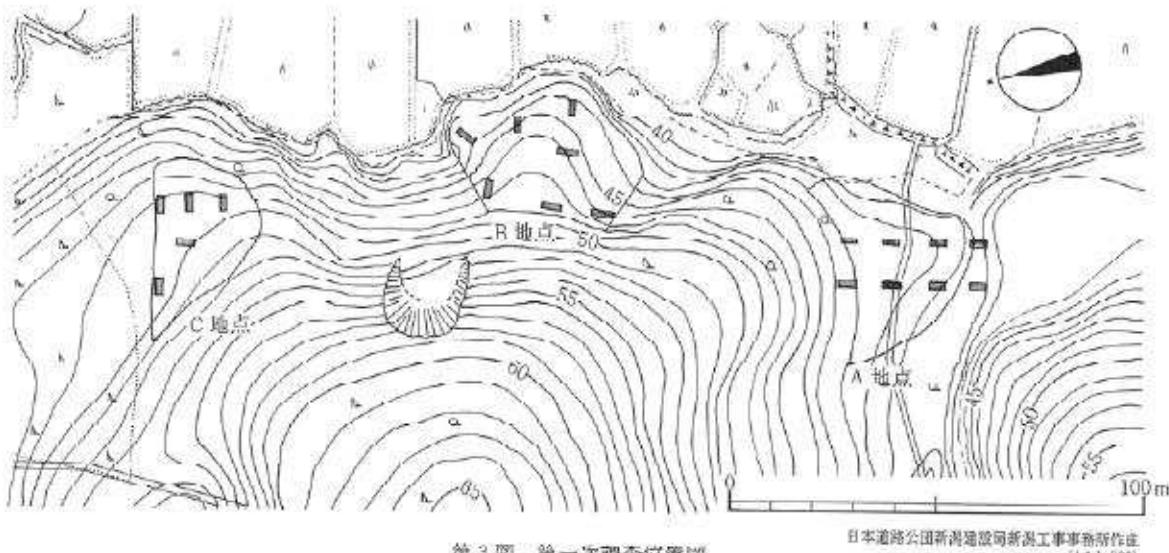
# 第Ⅲ章 調査の概要

## 1. 第一次調査

第一次調査は、県教委から委託された埋文事業団が平成7年3月13日から3月15日の間に実施した。調査対象範囲は3カ所に分かれていいたため、南からA地点・B地点・C地点と呼称して行った。この時点では遺跡としての対象地とその範囲が不明であったため、安田町大字六野瀬字獅子沢地内の土取り場内を対象に任意の位置に1.5m×3m程度のトレンチを設定した。トレンチはA地点に8カ所、B地点に7カ所、C地点に5カ所で、合計20カ所を調査した。バックキーを使用して徐々に掘り下げた後、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無と上層堆積状況を確認した。トレンチの総面積は160m<sup>2</sup>で、調査対象面積2,910m<sup>2</sup>に占める確率は5.5%であった。

第一次調査の結果、A地点の2つのトレンチから縄文土器片が合計14点出土した。遺構は検出されなかった。A地点は丘陵が延びる半島状の緩斜面で、この他にも遺物が存在する可能性があるため、遺物が出土した2つのトレンチ周辺の約580m<sup>2</sup>の範囲で第二次調査を実施する必要が生じた。

なお、B地点・C地点はともに遺構は検出されず、遺物も出土しなかったため第二次調査の必要はないことが確認された。



## 2. 第二次調査

### A. 調査方法

調査の基本工程は、基本層序の確認、包含層の発掘、遺構精査、遺構発掘である。

### 1) 基本層序の確認

調査区内に東西ヤクションベルト・南北ヤクションベルトを各1本ずつ設定し、そのベルト沿いに南側と西側に幅約50cmのトレンチを人力で掘削した。その壁面から層序を把握し、写真撮影、断面図を実測した。

### 2) 包含層の発掘

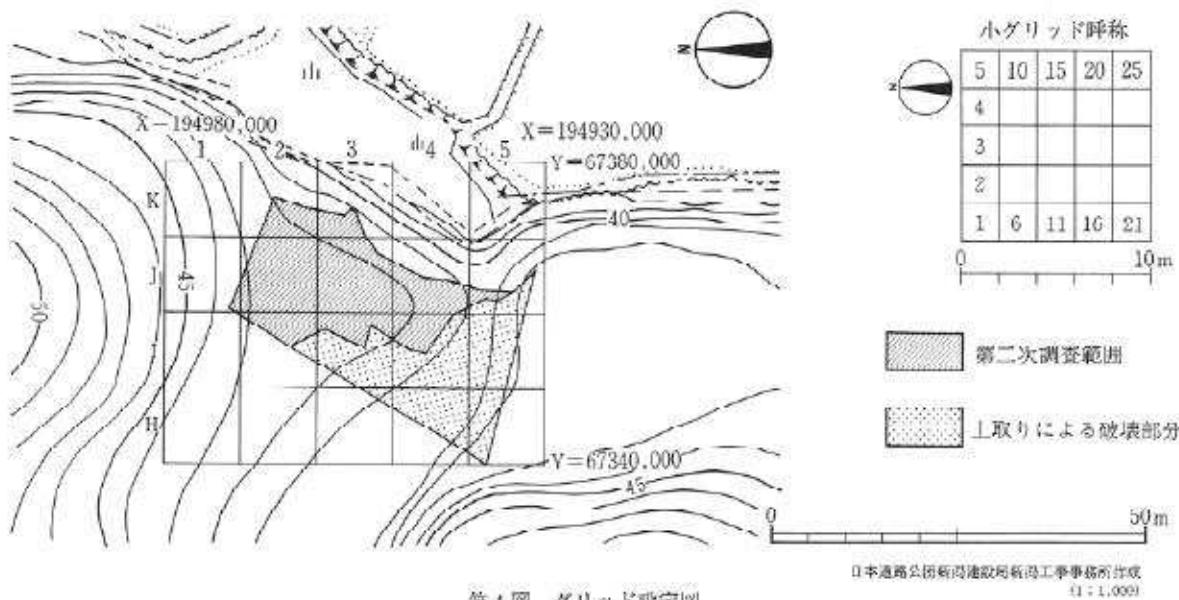
基本層序を確認後、表土(5-10cm)を人力で除去した。包含層の発掘も人力で行い、排土はベルト・コンベアで調査区外へ搬出した。包含層出土遺物はドットおよびレベル値を測定し、層位を明記して大グリッドごとに通し番号を付して取り上げた。

### 3) 遺構精査・発掘

包含層発掘後、遺構精査を行った。検出された遺構は半載した後、土層断面の写真撮影および縮尺1/10の断面図を作成した。その後完掘し、完掘写真を撮影した後、平面実測図を縮尺1/20で作成した(ピットは完掘写真と平面実測図のみ)。調査区の全体図は1/100の縮尺で作成した。また、IV層上面で、大グリッドを1m×1mに細分した各交点のレベル値を測定し、1/100の縮尺でコンタ図を作成した。

## B. グリッドの設定

グリッドの設定については、国土地理院の座標系に合わせ、第4図のように調査区をすべてカバーするようにした。長軸は真北方向に一致させて10mごとにアルファベットで示し、短軸には真東方向へ10mごとにアラビア数字で示した。10m×10mに区画された範囲を大グリッドとした。なお、グリッド隅の座標値は第4図のとおりである。大グリッドはさらに2m四方に分割して1-25の小グリッドとし、4J-5のように表示した。調査区域のグリッドの杭の打設およびレベル値の測量は業者委託とした。



### C. 調査経過

獅子沢遺跡の発掘調査は平成7年9月12日から平成7年10月3日までの期間で実施した。調査は基本的に調査員2名、委託業者世話人1名、作業員約15名の編成で行った。

第一次調査の結果、調査対象面積は580m<sup>2</sup>であった。ところが、9月4日に調査区の状況を観察したところ、調査区の西側部分360m<sup>2</sup>がすでに土取りされており、遺物包含層が破壊された状況であった。このため、当初の調査計画を変更することが余儀なくされた。急速、県教委と公団にこの旨を告げ、今後の調査について協議された。その結果、破壊を受けなかった部分220m<sup>2</sup>に加え、北東方向に90m<sup>2</sup>拡張し、併せて310m<sup>2</sup>を調査することになった。破壊された区域については、一部遺構確認面が残っている部分(60m<sup>2</sup>)が存在したので、この部分だけは発掘し遺構精査を行うことにした。以上のような経過から、調査対象面積は370m<sup>2</sup>になった。

発掘調査は隣接している円山遺跡と並行して進めた。9月1日から調査のための施設の設置、器材の搬入等の諸準備を行った。9月8日まで円山遺跡の表土剥ぎの作業を行った後、12日から作業員15名が獅子沢遺跡の現場に入り、本格的な調査となった。調査は調査区全体を層位ごとに発掘する方法で進めた。9月20日にはⅢ層の遺物包含層の発掘が終了し、21日からは、遺構精査および遺構発掘、写真撮影、遺構実測等を実施した。9月27日からⅣ層の発掘に入り、29日には終了した。新たに検出した遺構の発掘、写真撮影、実測を行い、10月2日に完掘全景写真を撮影した。3日には後片付けを全て終え、ベルト・コンベア等も撤収して調査を終了した。



作業風景

# 第IV章 遺 跡

## 1. 概 観

獅子沢遺跡は笛神丘陵の南端に位置し、舌状に伸びた小丘陵の緩やかな斜面上に立地している。標高は41m前後である。南へ約1kmには阿賀野川が大きく蛇行しながら流れている。付近は五頭連峰から分離した丘陵地や小河川によって形成された扇状地などの地形を呈しており、そこには、ツバタ遺跡・六野瀬遺跡をはじめ多くの遺跡が存在している。本遺跡のすぐ南側には旧石器時代の石器が多数出土した円山遺跡が隣接している。

調査区内は中央部が低く南北方向に緩やかに傾斜している。また、東西方向では中央部が高く、両方向に向かって傾斜している。平坦部は中央部に狭い範囲で認められるだけである。

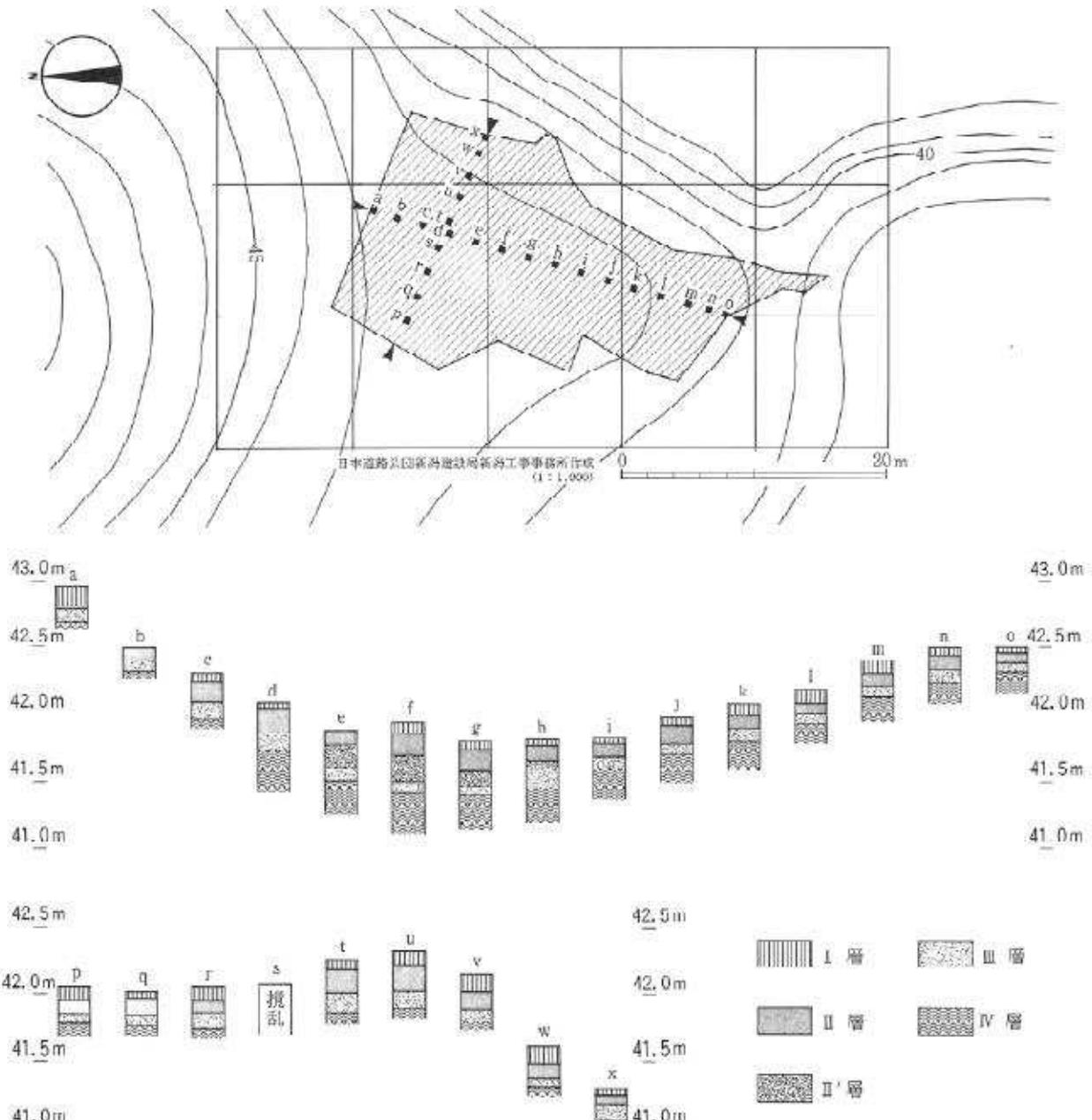
遺跡の調査面積は調査経過で述べたように370m<sup>2</sup>しかない状況であった。遺構は、土坑が2基と掘立柱建物跡1基、ピット2基が検出された。遺物は縄文時代晩期～弥生時代中期に所属する土器が主体で、3地点に比較的まとまって出土しており、その量は整理箱(54×34×10cm)で約4箱であった。

## 2. 層 序

基本層序はI層～VI層であり、ほぼ明確に分離される。一部沢の覆土状堆積を呈していた層(II'層)は別に識別した。遺物包含層はII・III層で、IV層は地山層となる。調査区内では、十層の厚みや色調に若干の変化はあるもののI層からVI層まではほぼ全域に共通して堆積している。

以下、各層の註記事項を記す。

- I 層 暗褐色土を呈する表土である。未分解の有機質を含む。層厚は5～10cm
- II 層 褐色シルトを呈する。縄文時代～弥生時代土器・石器出土。下面より旧石器時代の石器出土。  
層厚は10～15cm。
- II'層 黒褐色土を呈し、沢の覆土状に堆積している。暗褐色土がブロック状に混入し、層厚は深いところで約20cmである。遺物は出土していない。南北ベルトより東側にはこの層は認められない。西側は破壊を受けていたためにつながりは不明である。
- III 層 にぶい黄褐色シルト質粘土を呈する。旧石器時代の石器出土。層厚は10～15cm。
- IV 層 黄褐色シルト質粘土・明褐色シルト質粘土を呈する地山層である。層厚は約20cm。
- V 層 明黄褐色シルト質粘土を呈し、にぶい黄褐色粘土を少量含む。この上面を最終的な遺構確認面とした。層厚は約30cm。
- VI 層 にぶい褐色砂れき・花崗岩の風化砂れきを呈する。



第5図 土層柱状図

### 3. 遺構各説

検出された遺構は、土坑2基、ピット6基である。2基の土坑はII層発掘中にプランが検出され、調査区のはば中央部に隣接して位置する。ピット6基はIV層発掘中にプランを検出した。その内4基ははば力形にまわるため掘立柱建物跡と考えられる。調査区の南側の縦斜面の高い位置から検出された。

以下、遺構種別ごとに報告する。

## A. 土 坑(図版3・7・8)

### 1号土坑

調査区の3J-4・9グリッドで検出した。土坑は基本層序II層の褐色土から掘り込まれ、その底部は基本層序IV層に至る。平面はほぼ円形で、長径は72cm、短径は67cmである。確認面からの深さは14cmで掘り込みは浅い。底面レベルは41.56mを測る。覆土は2層に分層され、炭化物が多量に含まれている。

### 2号土坑

調査区の2I-23グリッドで検出した。土坑は基本層序II層の褐色土から掘り込まれ、その底部は基本層序IV層に至る。平面はほぼ円形で、長径は73cm、短径は67cmである。確認面からの深さは13cmで掘り込みは浅い。底面レベルは41.45mを測る。覆土は2層に分層され、炭化粒が含まれている。

## B. 掘立柱建物跡(図版2・8)

ピット3が4J-2グリッド、ピット4が4J-6グリッド、ピット5が3J-22グリッド、ピット6が3J-21グリッドから、それぞれ検出された。ピット5はトレンチを掘削したことによって西側の一部が破壊を受けている。IV層で検出された時点での平面は、長径が15cm前後、短径が13cm前後と円形状になっている。これらの4基のピットはほぼ方形にまわることや深さが同じレベルであることなどから掘立柱建物跡の柱穴と考えた。柱間寸法は、東側柱筋(桁行)が3.4m、西側柱筋が4.8mを測る。梁間は北側で2.7m、南側は2.9mである。柱内面積は約10.8m<sup>2</sup>である。4基ともIV層の黄褐色土を掘り込み、VI層のにぶい褐色の砂れき層も掘り込んでいる。覆土はシルト質の褐色土で、炭化粒を含んでいる。遺物は出土していない。

これら4基のピットの周辺からは縄文時代晩期～弥生時代中期の所産とみられる土器片がまとめて出土しており、ピット6の近くからは縄文時代晩期に比定される完形土器が出土している。これらの出土遺物から、その当時の掘立柱建物跡と考えられる。

## C. ピット(図版1)

ピット1が2J-11グリッド、ピット2が2J-13グリッドのIV層上面で検出された。ピット1の平面は、長径36cm・短径26cmの梢円形で、確認面からの深さは25cmである。ピット2の平面は、長径36cm・短径30cmの梢円形で、確認面からの深さは22cmである。2基ともIV層の黄褐色土を掘り込み、VI層のにぶい褐色の砂れき層も掘り込んでいる。覆土はシルト質の褐色土で、炭化粒が含まれている。遺物は出土していない。ピット2の近くから土器片がまとめて出土している。これらの土器の様式や検出された層位から、2つのピットは縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構と考えられる。

## 4. 出 土 遺 物

出土遺物は整理箱(54×34×10cm)にして、約4箱が出土した。大半が縄文時代晩期～弥生時代中期に所属する土器片である。この他に旧石器時代の石器が数点出土している。これら土器・石器の整理は、袋ごと洗浄、註記を行い、接合が可能なものは接合した。また、図化可能なものはできるだけ実測し、全て一

括して掲載した。実測不可能な土器片や刷片、碟等については掲載せず、グリッドごとに整理し、保管することにした。

## A. 土 器

前述したように縄文時代晩期～弥生時代中期の土器が大半を占めている。完形の土器が一個体出土しているが、これは器形や文様構成から縄文時代晩期のものと思われる。また、縄文時代前期・中期・後期に属する土器片も散発的に出土しているが数は少ない。土器片のほとんどは中小の破片で、文様も摩滅しているために、全体の器形や文様構成を推定できるものは少ない。土器が出土した地点は、掘立柱建物跡の周辺と1号・2号土坑の西側、ピット2の近くの3地点にほぼ集中している。

以下、所属時期別に分類して報告する。

### 1) 縄文時代前期の土器(2・3)

縄文時代前期後半期に所属するとと思われる同一個体の土器片が数点出土した。本書にはその内の2点を掲載した。2点とも口縁部片で諸種b式に併行する土器と推定される。半截竹管で細く浅めの半隆起線文を波状に上位と下位に横走させた文様を施している。さらにその隆起線文間には横位に浅い条痕文が施文されている。口唇部はミガキ調整されている。全体的に施文はやや粗雑であるが、内面・外側ともに強めの指圧による調整痕と檻ナデ調整痕が認められる。他の部位の出土が少ないので全体の器形は明確ではないが、深鉢形土器と想定される。胎土は粗めの砂粒を含みやや粗質であるが、焼成は良い。

### 2) 縄文時代中期の土器(4・5)

ピット2の近くの土器集中出土地点から2点出土している。2点とも細片のために全体の詳細な器形や文様構成は不明である。4は深鉢形土器の口縁部片と推定される。外側の無文部はミガキが加えられ滑らかに仕上げられている。口唇部から隆帯を丁寧に接着調整しながら垂下させている。口唇部に横位の沈線を施し、沈線の下は、隆帯によって梢円状の区画を構成するものと思われる。5は深鉢形土器の口縁部片と推定され、口唇部に沿って隆帯を付し、口縁部を肥厚させている。その際、隆帯との接合部をナデによって丁寧に接着調整している。隆帯上には半截竹管による凸文が縦位に施してある。2つの土器片の胎土は良質で、焼成も良い。

### 3) 縄文時代後期の土器(6・7)

6は後期中葉に属する人形の波状口縁部片である。口唇部は鋭角状にミガキ調整が施されている。口縁に沿って縄文帯が施文され、その下部には三日月状の無文部を挟んで横位の縄文帯が施されている。無文部は滑らかに仕上げられており、縄文部と無文部は沈線によって丁寧に区画されている。外側にはスス状の炭化物が密に付着している。また内面には指頭圧痕が認められる。胎土は雲母を含み良質で、焼成も良い。

7は立ち上がり具合から口縁部近くの細片と推定される。横位に1本の浅い沈線を施し、沈線から上部は無文で滑らかに仕上げられ、沈線の下には羽状縄文が施文されている。外側にはスス状の炭化物が付着している。内面はミガキ調整が施され、滑らかな面を呈している。胎土は良質で、焼成も良い。

## 4) 縄文時代晩期～弥生時代中期の土器(1～8～37)

土器片の文様や推察される器形からこの時期に所属している。ただし、1を除き全てが細片のため、詳細な時期や文様構成を把握することはできない。

以下、文様別に分類し、報告する。また、深鉢形土器底部片についても同時期に所属していると推定されるため、ここに含めて報告する。

## 単節縄文 LR 施文の土器(1)

本遺跡出土土器の中で唯一全体の器形が把握できるもので、水平口縁を有する深鉢形土器である。法量は、口径が29.7cm、底径が9.6cm、器高が37.5cmである。胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はやや内湾する。口唇部はやや直立気味になり、ミガキ調整が施され無文帶を呈する。器面には口縁部から底部まで単節縄文 LR が施文されている。さらに胴部には綴縦文がほぼ等間隔に横走させている。縄文施文後は部分的にミガカレ、綴縦文が消されているところもみられる。口縁部内面は指頭圧痕によって調整が施されている。胎土はやや粗めの砂粒と雲母を含みやや粗質であるが、焼成は良い。

## 変形工字文・磨消縄文施文の土器(8～15)

8の口縁部片と9～12の胴部片は同一個体である。渡邊氏の「縄文時代晩期終末から弥生時代中期前葉年試案」によると弥生時代中期前葉のⅡa期に所属すると思われる。体部上半の文様帯に沈線による変形工字文と磨消縄文 LR が施されている。器形は、浅鉢形十器と推定できる。内面には指頭圧痕がみられ、ナデ調整が施されている。胎土は粗めの砂粒を少し含むが、良質で、焼成も良い。

13と14は同一個体の口縁部片と胴部片である。口縁がやや内湾した薄手の浅鉢形土器と思われる。口縁部片にはやや粗雑な平行沈線が4条認められる。平行沈線の下位には縄文が施文されており、磨消縄文の痕跡が認められる。14の胴部は無文と判断される。2点とも細片で、器面が著しく荒れているため、全体の詳細な器形や文様構成は不明である。口唇部の内面には横ナデ調整が施されている。外面・内面の両面におこげ状の炭化物が多量に付着している。胎土は砂粒を多く含みやや粗質で、焼成も良くない。

15は壺形土器の肩部片と推定される。頸部に沿って横位に隆起線文を1条巡らし、その下位に弧状の沈線を施し、その区画内に単節縄文 LR が充填されている。縄文は摩滅しているために明瞭ではない。縄文の区画外は丁寧にミガカレ、滑らかに仕上げられている。内面もミガキが施され、滑らかな面を呈している。この個体の破片は1点のみで、詳細な器形・文様構成は把握できない。胎土は良質で、焼成も良い。

## 沈線による文様施文の十器(16)

壺形土器の頸部片で、その器形から弥生時代前期～中期前葉に所属すると推定できる。外面の肩部から頸部にかけて、1～3条の浅めの沈線によって横位に菱形状の文様を施文しているものと思われるが、器面が著しく荒れているために明瞭ではない。肩部の内面には輪積痕が認められ、指頭圧痕が観察できる。胎土は他の土器と著しく異なった黒褐色を呈し、砂粒を含みやや粗質で、焼成もあまり良くない。

## 縄文施文の土器(17)

外面に浅めの縄文を施文した粗製土器の胴部片と推定できる。内面には強めの指頭圧痕が認められ、その上を幅7mmの範囲の工具で横ナデ調整が施されている。胎土は大きな砂粒を含み粗質であるが、焼成は良い。

## 条痕文施文の土器(18～29)

18～29は全て細片のため詳細な時期や全体の器形は把握できない。しかし、晩期終末に条痕文が多用さ

れる〔渡邊1990〕ことや土器片の立ち上がり具合から、縄文時代晩期から弥生時代にかけての深鉢形の粗製土器の口縁部片(18・19)と胴部片(20~29)と思われる。外面には全面にわたって各種の条痕文が施されている。条痕の多くは櫛状工具によるものと思われ、条痕の条間隔あるいは条の太さの均一のものとそうでないもの、各条が密のものや疎のものなど多彩である。外面・内面に指頭圧痕がみられるものや、ナデ調整が施されているものなどがみられる。18・19の外面は被熱により赤色に変化している。24は両面に、26は外面にスス状の炭化物が付着している。胎土は粗めの砂粒を含み粗質であるが、焼成は良い。

#### 無文の土器(30~37)

30・32は口縁部片で、他は胴部片である。37は小型の鉢形土器の胴部片、他は深鉢形土器の胴部片と思われる。33は無文と思われるが、傷状の痕跡が認められる。全て両面か片面にナデ調整が施されている。30・33・35には指頭圧痕が認められる。37の内面は籠状の工具でナア調整を施した痕跡が見られる。36の内面と32・37の外面にはスス状の、33の外面にはおこげ状の炭化物がそれぞれ付着している。胎土は粗めの砂粒を含み粗質であるが、焼成は良い。

#### 深鉢形土器底部(38~42)

深鉢形土器と思われる底部片が7点出土している。本書にはその内の5点について報告する。38~41の底面には網代圧痕が認められる。39と40は網代圧痕や胎土が類似していることから同一個体の底部片の可能性が大きい。これらの底部片からは詳細な時期は把握できないが、周辺から出土した土器の大半が縄文時代晩期~弥生時代中期に属していることから、ほぼ同時期の所産と考えられる。網代編みには竹材と思われる物の繊維が使用され、網目の間隔は経緯ともに比較的密に編まれている。経緯の巾や間隔を焼き上がりの段階で観察すると、38の網代痕の経緯の巾は0.2~0.4cmで、経が1本超え 1本潜り、緯が1本潜り 1本超えの1本送り〔荒木1968〕で編んだ網代を使用している。39の経緯の巾は0.1~0.2cmで間隔は0.2~0.3cmで、やや複雑な編み目であるが、経が2本潜り 1本超え、緯が2本超え 1本潜りの右1本送り〔荒木1968〕で編んだ網代を使用している。41は非常に細い繊維が使用されており、経が0.05cm前後、緯が0.1cm前後の網代痕を呈している。間隔も0.1cm前後と緻密に編まれている。

42の底面には一部条痕が観察され、指頭圧痕が認められる。側面には櫛状工具による斜位の条痕が施されていることから、側面に条痕文を施文した粗製土器の底部と判断できる。

底部底面は全て水平の形態を有し、ナデ調整が施されている。41の内面は上げ底を呈し、39・40・42の内面とともにナア調整が施されている。底部径は38が約12cm、39が約11cm、41が約12cmである。38の胎土は良質で、焼成も良い。39~42は粗製土器の底部と思われ、胎土は粗めの砂粒を含み粗質で、焼成もあまり良くない。

#### 5) ミニチュア土器(43・44)

2点とも底部のみの出土で全体の器形が窺えないが、底部からの側面の立ち上がり具合から深鉢形を呈すると考えられる。

43は手づくねによる成形で、浅い上げ底を呈している。底径は4.2cmである。外面・内面ともにナデ調整が施されている。胎土は粗めの砂粒を多く含み粗質であるが、焼成は良い。

44は巻きあけの成形で、丁寧な作りになっている。底径は4.4cmである。側面の外面には単筋織文LRを施文し、その上からミガイたと思われる痕跡が認められる。底部外面には指頭圧痕が認められ、外面内面ともナア調整が施されている。底部外面にはスス状の炭化物が付着している。胎土は砂粒を含みやや粗

質であるが、焼成は良い。

#### 6) 焼成粘土塊(45)

大きなくぼみが表と裏にあり、親指と人差し指で丁度よくつまめるような形態をしている。用途は不明である。くぼみ部分は指頭による圧痕とナザの痕跡が認められる。くぼみとその周辺部には傷状の条痕が数箇所にみられる。表に一部欠損したと思われる断面が確認できる。胎土は良質で、焼成も良い。

### B. 石 器

獅子沢遺跡から出土した石器・剝片類はわずかに16点にすぎない。他に被熱したと思われる礫が12点出土している。本書には石器・剝片類のうち9点について報告する。内訳は、撲器1点、石刀1点、石核1点、剝片類5点、蔽石1点である。記載しなかった剝片類と砾については出土地点を註記し、整埋・保管することとした。

出土状況は調査区全体に散発的に出土しており、集中分布はみられなかった。

46-48の3点は、隣接している旧石器時代の遺跡である円山遺跡の石材の選択と同じ傾向であることから旧石器時代の遺物と判断した。しかし、極少数で出土地点も離れているため、どのような形で持ち込まれ、使用されたものかは不明である。49-53は石材の選択が上記の3点と若干異なり、しかも剝片の形状に違いがみられることから、縄文時代の石器と判断した。

以下、器種ごとに報告する。

#### 1) 撲 器(46)

長軸上の端部に急斜度調整による円弧状の刃部を設けた石器である。46は石刀を素材とし、刃部は片面調整で背面下端にやや細かい剥離による一次加工が加えられている。やや左トガリの円弧状の刃部を呈している。使用痕かどうかは不明であるが、微細剥離が背面刃部と背面左側縁に集中的に認められる。また、腹面左側縁には、浅角度で不連続な二次加工が認められる。打面は調整打面で、打面下にはやや大きな打瘤が観察できる。石材は硬質頁岩である。

#### 2) 石 刀(47)

石刀は巾が1cm以上、長さが巾の二倍以上の縦長剝片で、両側縁と稜線がほぼ平行するものである。47はその上部と下部を欠損あるいは切断したものと思われる。背面左側縁部には自然面が認められる。石材は硬質頁岩である。

#### 3) 石 核(50)

50は剝片剥離作業が進行していないが、打面と剥離作業面と思われる面がみられることから、石核と判断した。しかし、剥離作業面の状態を観察すると、目的剝片が剥離できなかったとも推定される。石材は頁岩である。

#### 4) 剥 片 類(48・49・51-53)

53を除きいずれも不定形な剝片である。53は二次加工が加えられている可能性もあるが、判断しかねる

ためこの類に含めた。

48は背面下端と腹面左側に節理面が認められ、背面左側縁に細かい剥離痕が観察できるが、二次加工かどうか不明である。打面は除去されている。石材は硬質頁岩である。

49は剥離面打面の剥片で、側縁部には細かい剥離痕が認められるが、風化の状態から最近のものと判断できる。背面左側縁には折断状の剥離が見られる。石材は頁岩である。

51は打面が除去され、背面には大きく自然面を残す。石材は墨灰岩である。

52は背面下端に自然面を残し、打面は除去されている。石材は墨灰岩である。

53は剥片類に含めたが、背面に二次加工の剥離が施されていることから不定形の剥片石器と考えられる。背面下端には微細剥離痕が観察できる。石材は頁岩である。

### 5) 敲 石(54)

54は無加工の礎である。1の縄文時代晚期のものと思われる完形土器とともに出土していることから、この時期に使用された敲石と推測される。上端には敲痕が、表面には中央部には凹痕が認められる。裏面と側面には磨痕も認められる。石材は花崗岩である。



遺跡近景

## 4. 出土遺物

第2表 土器観察表

※出土地点の番号は「図版1 造物出土状況図」に記載されている番号に対応している。

No	器種	出土地点・No	層位	遺存部位	色・調	文様・備考
1	深鉢	3J21No71	II	元形	淡黄色	単節縦文 L.R. 刷部に横縞文 口径29.7cm 壁厚9.6cm 高さ37.5cm
2	深鉢	3J12No60	II	口縁部	灰黄褐色	横位条縞文 半截竹管による隆起縞文 諸縫合式併行期
3	深鉢	3J7No28	II	口縁部	灰黄褐色	2と同一個体
4	深鉢	2J17No8	II	口縁部	浅黃褐色	口唇部横位沈線 沈線下に半截竹管による隆起縞文 贅付底帯が垂下
5	深鉢	2J11No14	II	口縁部	に赤い黄褐色	口唇部の肥付斜面に半截竹管による隆起縞文
6	深鉢	2J15No5	II	口縁部	淺青褐色	波狀口縁部 帯状縦文帶 外面炭化物 三化牛込
7	深鉢	2J15No3	II	脇部上半	に赤い褐色	羽状縦文 外面炭化物
8	浅鉢	4J2No9, 11	II	口縁部	に赤い黄褐色	変形工字文 幕消縦文
9	浅鉢	4J2No13	II	脇部	に赤い黄褐色	8と同一個体
10	浅鉢	4J2No8	II	脇部	に赤い黄褐色	8と同一個体
11	浅鉢	4J2No7	I	脇部	に赤い黄褐色	9と同一個体
12	浅鉢	4J2No14	I	脇部	に赤い黄褐色	8と同一個体
13	浅鉢	4J2No22	II	口縁部	黒褐色	横位平行沈線 磨消縦文 外面内面炭化物
14	浅鉢	4J2No24	II	脇部	黒褐色	黒文 外面内面炭化物 13と同一個体
15	壺	2J17No11	II	肩部	に赤い黄褐色	幕消縦文 沈線による弧線文 弧線文内に単節縦文し丸充填
16	壺	4J3No27, 28, 29	II	口縁部	褐色	沈線文
17	深鉢	3J17No66	II	脇部	に赤い黄褐色	縞文
18	深鉢	4J2No10	II	口縁部	赤色	斜位条縞文 口唇部に横位沈線
19	深鉢	4J9No13, 68	II	口縁部	に赤い黄褐色	斜位条縞文 口唇部に横位沈線
20	深鉢	4J1No3	II	脇部	黒褐色	斜位条縞文
21	深鉢	4J1No5	II	脇部	に赤い黄褐色	斜位条縞文
22	深鉢	4J1No1	II	脇部	に赤い黄褐色	斜位条縞文
23	深鉢	4J3No72	III	脇部	に赤い黄褐色	斜位条縞文 外面磨痕
24	深鉢	3J2No8	II	脇部	に赤い黄褐色	斜位条縞文 外面内面炭化物
25	深鉢	3J3No13	II	脇部	に赤い黄褐色	斜位条縞文
26	深鉢	3J11No12	II	脇部	に赤い黄褐色	斜位条縞文 外面炭化物
27	深鉢	4J2No15, 69	II	脇部	に赤い黄褐色	斜位条縞文
28	深鉢	4J2No20	II	脇部	に赤い黄褐色	27と同一個体
29	深鉢	4J7No56	II	脇部	に赤い黄褐色	27と同一個体
30	深鉢	4J7No49	II	口縁部	に赤い黄褐色	無文
31	深鉢	4J7No48	II	脇部	に赤い黄褐色	30と同一個体
32	深鉢	3J2No1	II	口縁部	灰黃褐色	無文 外面炭化物
33	深鉢	3J22No72	II	脇部	に赤い黄褐色	無文 外面炭化物
34	深鉢	3J2No5	II	脇部	に赤い黄褐色	無文
35	深鉢	4J6No37	II	脇部	に赤い黄褐色	無文
36	深鉢	2J10No3	II	脇部下半	に赤い黄褐色	無文 内面炭化物
37	鉢	3J20No1, 2	II	脇部	灰褐色	無文 外面炭化物
38	深鉢	2J17No15, 22, 23	II	底部	黄褐色	銅代压痕 底径約12cm
39	深鉢	4J6No56, 61	II	底部	に赤い黄褐色	銅代压痕 底径約11cm
40	深鉢	4J6No55	II	底部	に赤い黄褐色	39と同一個体
41	深鉢	3J13No61	II	底部	に赤い黄褐色	銅代压痕 底径約12cm
42	深鉢	3J8No27	II	底部	に赤い黄褐色	銅面斜位条縞文 底面L一部条縞
43	セニアコア土器	3J12No55	II	底部	褐色	無文 深い上部底 底径4.2cm
44	セニアコア土器	4J2No12	II	底部	黒褐色	底面に炭化物 個面單縦文 L.R. 底径4.4cm
45	焼成粘土塊	3J23No74	II		浅黃褐色	裏面黒褐色 重さ44g

第3表 石器観察表

( ) 内は現存値を示す

No	器種	出土地点	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石材	備考
46	擗器	4J18No65	II+	10.0	4.8	1.8	40	頁岩	完形
47	石刃	3K1No1	III	(4.5)	(4.3)	(1.4)	(28)	頁岩	上部と下部に欠損打面を有す
48	剥片	3J8No40	III	6.5	2.8	0.8	12	頁岩	
49	剥片	4J9No4	II	5.7	3.8	1.4	24	頁岩	
50	石核	4J7No67	II+	7.9	9.7	0.8	630	頁岩	
51	剥片	2J10No2	II	8.4	6.6	1.7	83	凝灰岩	
52	剥片	3J21No67	II	3.2	4.4	1.3	15	凝灰岩	
53	不定形石器	2J25No21	II	2.8	1.7	1.0	4	頁岩	
54	敲石	3J21No81	II	12.3	5.9	4.3	366	花崗岩	

# 第V章 自然科学の分析調査

株式会社 古環境研究所

## 1. はじめに

1号土坑・2号土坑はその形狀から歴史時代の炭焼窯と考えられている〔藤巻1996〕。掘立柱建物跡の柱穴は、遺構確認面や周辺から出土した遺物から、縄文時代晩期から弥生時代中期の遺構と推定される。しかし、遺構内からは土器等の遺物が伴っていないためその年代は不明である。遺構の覆土から炭化物が伴出したため、これによりそれぞれの遺構の年代を確認する目的として分析調査を行った。

なお、試料名のNo.1は1号土坑覆土の炭化物、No.2は2号土坑覆土の炭化物、No.3は掘立柱建物跡の柱穴覆土の炭化物となっている。

## 2. 試料と方法

試料名	種類	前処理・調整	測定法
No.1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線計数法 (標準測定)
No.2	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 長時間測定 ベンゼン合成	$\beta$ 線計数法
No.3	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	AMS法

## 3. 測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年B.P.)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年B.P.)	歴年代 (上段: 空点, 下段: $1\sigma$ )	測定No (Rets-)
S K 1 覆土2層	1070 ± 50	-28.3	1020 ± 50	AD 1015 AD 990 to 1035	91185
S K 2 覆土2層	1500 ± 50	-28.2	1450 ± 50	AD 630 AD 590 to 650	91184
S K 3 P 4 覆土層	2360 ± 40	-26.9	2230 ± 40	BC 390 BC 400 to 380	91183

### A. $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、単純に現在(1950年 AD)から何年前(BP)かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は5,568年を用いた。

### B. $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

### C. 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$  測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

### D. 歴年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中  $^{14}\text{C}$  濃度の変動を補正することにより、歴年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の  $^{14}\text{C}$  の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年 BP より古い試料には適用できない。歴年代の交点とは、補正  $^{14}\text{C}$  年代値と歴年代補正曲線との交点の歴年代値を意味する。 $1\sigma$  は補正  $^{14}\text{C}$  年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の  $1\sigma$  値が表記される場合もある。

# 第VI章 まとめ

獅子沢遺跡の調査範囲は、土取り工事によって破壊された部分を除き、拡張部分を併せた区域で、面積は約370m<sup>2</sup>である。当遺跡の現況は山林で人の手がほとんど加えられておらず、遺物包含層や遺構の残存状況は良好と言える。しかし、出土土器のはほとんどは小・細破片で、文様も摩滅しているものが多いため、全体の器形や文様構成を把握できるものは少ない。土器片の文様等から推察すると、遺跡の時期は縄文時代晩期から弥生時代中期に所属するものと考えられる。他に、旧石器時代の石器・縄文時代前期・中期・後期に属する土器片も散発的に出土しているが、極めて少數である。遺物の出土は、すべてが遺物包含層からの出土で、明確に遺構に伴うと判断されたものはなかった。

当遺跡は、縄文時代晩期終末～弥生時代中期前葉の主要遺跡である京ヶ瀬村猫山遺跡・水原町下金田遺跡・安田町横峯A遺跡・安田町大曲遺跡・安田町山下A遺跡・安田町六野瀬遺跡等と近接しており、今後それらの遺跡と共に当地域の歴史研究に寄与できるものと考える。

## 1. 遺構について

遺構は、土坑2基、掘立柱建物跡1基、ピット2基が検出された。

遺構の詳細な時期は、それに伴う遺物等が出土していないために明確ではないが、出土遺物の大半が縄文時代晩期から弥生時代中期に所属していることから、掘立柱建物跡については多少の前後はあるもののほぼ同時期の所産のものであろうと推察される。2基の土坑は隣接しており、形態・状況がほぼ同じであることから、深く関わり合っているものと思われる。覆土から遺物等の出土がみられなかっただため、時期・性格を解明することはできなかったが、歴史時代の炭焼窯と考えられている〔藤巻1996〕。

掘立柱建物跡とみられるピット4基がほぼ方形に巡る柱穴遺構が1基検出されたが、当遺跡は丘陵緩野の緩やかな斜面上に位置しているために平坦部が少なく、大規模な集落等が存在していたとは考えにくい。一時的な仮の住まい等に利用されたものと考えるのが妥当だと思われる。他にピットが2基検出されているが、その南方向部分が土取り工事によってすでに破壊されており、その際遺構も消滅してしまっている可能性が高い。

## 2. 遺物について

出土遺物は整理箱にして約4箱とわずかであった。第IV章の4で述べたように、大半は細片で、文様の摩滅も著しいために詳細な時期と器形を確定できない。唯一全体の器形が把握できた1の深鉢形土器は、器形・文様構成から、新發田市村尻遺跡D区から出土した縄文時代晩期終末期の深鉢形土器に比定できる。8～12は、体部上半の文様帶に大洞A'式的な沈線による変形工字文と磨消繩文が施されていることで特徴される。縄文時代晩期終末から弥生時代中期前葉編年試案のIIa期には、変形丁字文の変異が進み、磨消繩文が主要文様帶内に用いられる〔渡邊1990〕ことから、この時期に比定することが可能であろう。この時期の代表的な遺跡である黒崎町緒立遺跡や水原町下金田遺跡から類似した土器が出土している。16の

頸部片は、立ち上がり具合から、短頸のかなり大型の壺形土器と推定される。器形的には、弥生時代中期初頭に所属するものと考えられる。

18~29の各種の条痕文が施されている土器片は、・縄文時代晚期終末に条痕文が多用される。・Ⅰ期に粗製の深鉢が再び増加する。・Ⅱa期に粗製土器は深鉢が土体を占める(渡邊1990)ことから、晚期終末から弥生時代初頭にかけての土器と推定される。県内ではこの種の土器の口縁部に波状汎線文が結節回転文を施す場合が多く、これらの文様は弥生時代前期から中期における粗製土器の代表的な施文方法であるのに対し、当遺跡の上器にはこの文様を有していない。これらの土器は、大洞A'式から直後の弥生移行期の土器と共に出土する例が多い[関1973]ことから、この時期の粗製深鉢形土器の一群と考えられる。

6の波状口縁部片は縄文時代後期中葉の加曾利B2式期、県内の三仏生式併行期に所属するものである。同じ口縁部を有する土器が、安田町中道遺跡や安田町藤堂遺跡・新発田市村尻遺跡・浦川原村顕聖寺遺跡からも出土している。その他に、2・3の縄文時代前期の諸磯b式併行期に属するとと思われる土器片や4・5の縄文時代中期に属すると思われる土器片、さらには46~48の旧石器時代の石器も出土している。それぞれ僅めて少數の出土であることや破片のみであることから、どのようにして持ち込まれ、使用されたものかは不明である。

### 3. $^{14}\text{C}$ 年代測定の結果について

掘立柱建物跡の遺構について、検出された層位や周辺から出土した遺物のほとんどが、縄文時代晚期から弥生時代中期に所属していることから、遺物と同時期のものと推定した。より年代を明らかにするため  $^{14}\text{C}$  年代測定を試みた。結果は、 $2330 \pm 40$ (B.C. 390, B.C. 400 to 380)であり、縄文時代晚期終末から弥生時代初頭に相当する測定値が得られた。この分析により、遺構と遺物はほぼ同時期の所産と判断できる貴重な資料を得ることができた。

また、2基の土坑はその形状から歴史時代の炭焼窯であると考察されている[藤巻1996]が、理科学的か年代測定は行われていない。今回 $1020 \pm 50$ (A.D. 1015, A.D. 990 to 1035),  $1450 \pm 50$ (A.D. 630, A.D. 590 to 650)という測定値が得られたことは、先の考察を裏付けることとなり、今後、この窯の遺構、それに係る生業研究に貴重な資料を得ることができた。

## 要 約

1. 獅子沢遺跡は、新潟県北蒲原郡安田町大字六野瀬字獅子沢1804ほかに所在する。遺跡は、阿賀野川右岸の標高約40mの丘陵裾野の緩斜面上に位置する。阿賀野川との比高差は約20mを測る。
2. 発掘調査は、北陸自動車道建設の土取り工事に伴い、平成7年9月12日から10月3日にかけて実施した。調査面積は当初580m<sup>2</sup>の計画であったが、調査前に土取りによって300m<sup>2</sup>が破壊されていた。急速北東方向に破壊されずに残っていた区域が存在したので、この部分90m<sup>2</sup>を拡張した。破壊を受けた部分の内遺構確認面が残っていた部分60m<sup>2</sup>と併せて、調査面積は約370m<sup>2</sup>である。
3. 遺構は、土坑2基、掘立柱建物跡1基、ピット2基が検出された。しかし、それらの遺構に伴う遺物の出土がなかったために詳細な時期は解明できない。土坑2基は形状の類似から歴史時代の炭焼窯と考えられている。掘立柱建物跡は、その周囲から出土した土器が、縄文時代晩期から弥生時代中期に所属していることから、ほぼその時期のものと推定できる。
- また、遺構内から出土した炭化物の<sup>14</sup>Cの年代測定により、1号土坑は1020±50y、B.P.(A.D. 1015, A.D. 990 to 1035)、2号土坑は1450±50y、B.P.(A.D. 630, A.D. 590 to 650)、掘立柱建物跡は2330±40y、B.P.(B.C. 390, B.C. 400 to 380)という結果がでている。
4. 出土遺物は、整埋箱(54×34×10cm)で約4箱であり、縄文時代晩期から弥生時代中期に所属するものが大半を占めている。完形のものが1個体出土しているが、これは縄文時代晩期に所属すると思われる。他は中・小の破片がほとんどで、文様も摩滅しているため全体の器形・文様構成を推定できるものは少ない。他に旧石器時代の石器が数点出土しているが、これらは隣接している円山遺跡と関わりがあるものと考えられる。縄文時代の石器も数点出土している。

## 引用・参考文献

- ア荒木 ヨシ 1968 「縄文式時代の網代編み」『物質文化42』 物質文化研究会
- イ家田順一郎 1980 「安田町文化財調査報告書(7) 上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ(概報)中道遺跡」 新潟県安田町教育委員会
- 石川日出志 1992 「新潟県安田町文化財調査報告12 六野瀬遺跡1990年調査報告書 立川ノワインド工業株式会社東日本工場増設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書」 新潟県安田町教育委員会
- 石原 正敏 1993 「新潟県の諸機式土器」「第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相」 縄文セミナーの会
- カ加藤 晋平 1980 「図録 石器の基礎知識Ⅰ 先土器(上)」 柏書房
- 金子 拓男 1983 「諸立遺跡発掘調査報告書」 新潟県黒埼町教育委員会
- 龟井 功・本間 信昭ほか 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集 越後自動車道関係発掘調査報告書 秋野遺跡・宮林遺跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川上 貞雄 1979 「安田町文化財調査報告書(4) 上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 横峯縄塚群」 新潟県安田町教育委員会
- 川上 貞雄ほか 1981 「安田町文化財調査報告(3) 上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 横峯A遺跡・横峯D遺跡」 新潟県安田町教育委員会
- 川上 貞雄ほか 1980 「安田町文化財調査報告(7) 上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ(概報) 中道遺跡」 新潟県安田町教育委員会
- 川上 貞雄 1982 「安田町文化財調査報告(8) ツベタ遺跡第3次発掘調査 '82年度概報」 新潟県安田町教育委員会
- コ小林 達雄 1994 「縄文土器の研究」 小学館
- サ磐神団体研究グループ 1982 「磐神丘陵の第四系」『地質学雑誌』
- 佐藤 正知ほか 1995 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第70集 越後自動車道関係発掘調査報告書 蛇沢遺跡・上城遺跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦ほか 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 越後自動車道関係発掘調査報告書 上ノ平遺跡A地点」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 人鈴木 郁大ほか 1983 「新潟県下越地域土地分類基本調査 津川」 新潟県農地部農村総合整備課
- 鈴木 俊成ほか 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 北陸自動車道関係発掘調査報告書 一之口遺跡東地区」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木道之助 1981 「図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文」 柏書房
- セ間 雅之ほか 1972 「安田町文化財調査報告(2) ツベタ遺跡発掘調査報告」 新潟県安田町教育委員会
- 間 雅之ほか 1973 「下金田遺跡 新潟県水原町下金田遺跡発掘調査報告」 新潟県水原町立水原博物館
- 間 雅之ほか 1982 「新発田市埋蔵文化財調査報告書第4 村尻遺跡」 新潟県新発田市教育委員会
- タ高橋 保ほか 1992 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡」 新潟県教育委員会
- 高浜 信行・野崎 保 1981 「新潟平野東線 五頭山地西麓の土石流発達史」『地質学雑誌87』
- 田辺 昭三 1978 「弥生土器の地域性とその展開」『日本原始美術大系2 弥生土器 須恵器』 講談社
- ナ中川 成夫ほか 1966 「新潟県安田町ツベタ遺跡の調査 安田町文化財調査報告1」 新潟県安田町教育委員会
- 中澤 敏ほか 1995 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第67集 橋形無線中継所発掘調査報告書 高強城跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中村孝三郎ほか 1957 「三仏生」 新潟県長岡市立科学博物館
- ニ新潟県 1983 「新潟県史 資料編1」 新潟県
- ノ藤巻 正信ほか 1991 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡」 新潟県教育委員会
- 藤巻 正信ほか 1996 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第71集 関越自動車道関係発掘調査報告書 吉ヶ沢遺跡A地点・上ノ平遺跡B地点・中峰遺跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ホ本間 信昭ほか 1974 「安田町文化財調査報告(3) 藤堂遺跡発掘調査概報」 新潟県安田町教育委員会
- ヤ山内 清男 1979 「日本先史土器の縄文」 先史考古学会
- 山下 弘 1970 「柏崎 繩文線の捉え」『島弧と海洋(1)』
- ワ濱邊 明和 1990 「新潟県における縄文時代晚期終末から弥生時代中期前葉の土器」『新潟考古学講話会会報第6号』 新潟考古学講話会

# 図 版

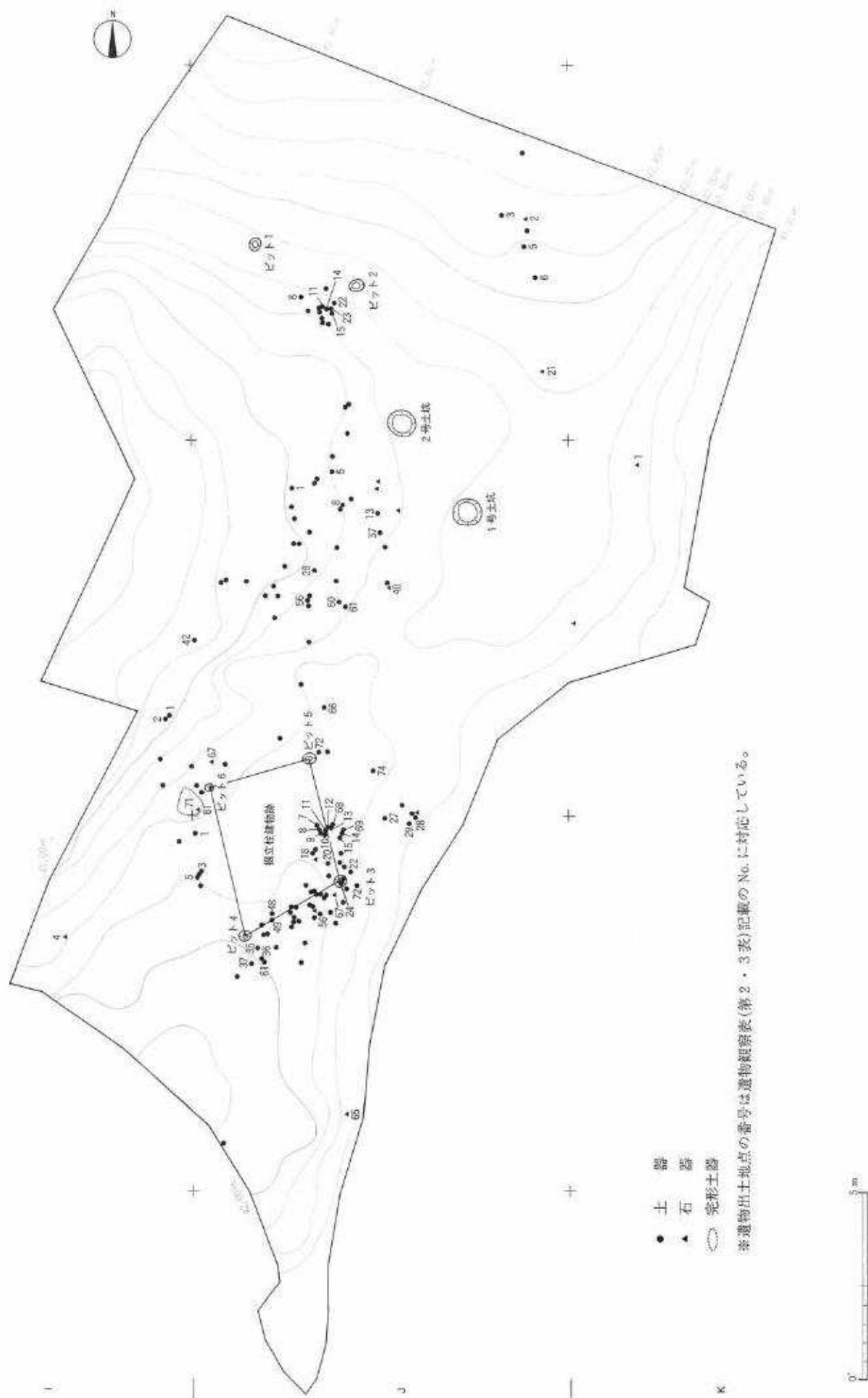
## 凡 例

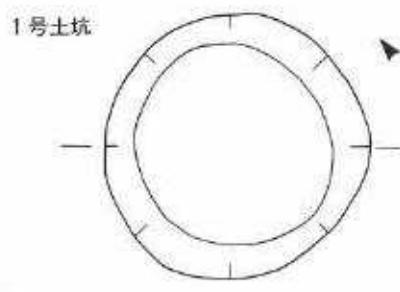
ここには遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。

1. 遺構は種別ごとに一連番号を付し、土坑、掘立柱建  
物跡に分類した。
2. 遺物は、一連番号を付し、写真もこれにしたがった。
3. 遺物実測図において、口径復元が困難なものは、断  
面と外形線のみを表示した。
4. 実測図・写真の縮尺は各図版に示した。

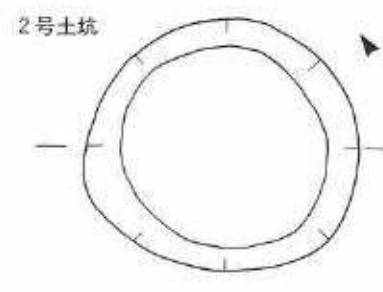
### 調査区全体図・遺物出土状況図

圖版 1





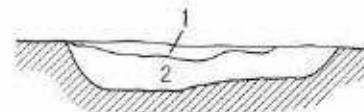
41.9m



41.9m

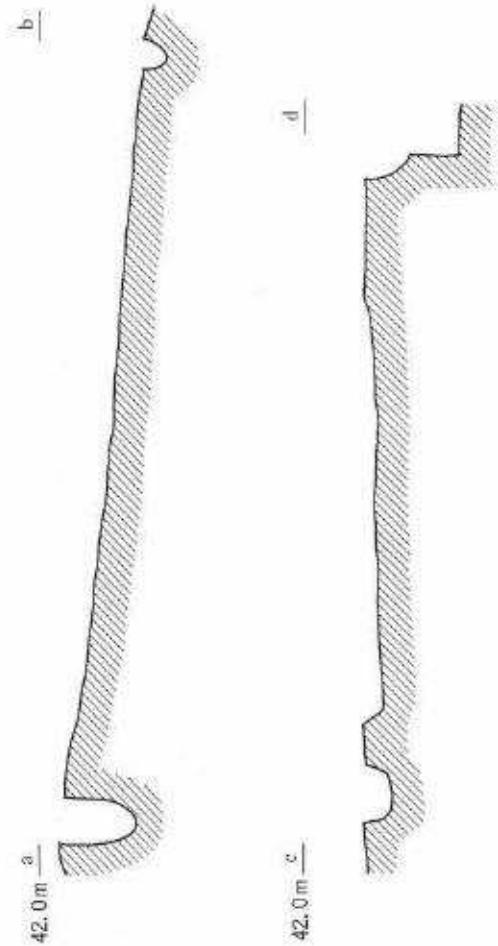


- 1 黒褐色土 しまりやや弱く粘性をもつ、多量の炭化物を含む。  
2 暗褐色土 しまりやや強く粘性をもつ、炭化物を含む。



- 1 黒褐色土 しまりやや弱く粘性をもつ、多量の炭化物を含む。  
2 茶色土 しまりやや強く粘性をもつ、炭化物を含む。

## 掘立柱建物跡



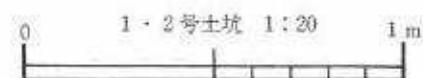
42.0m e

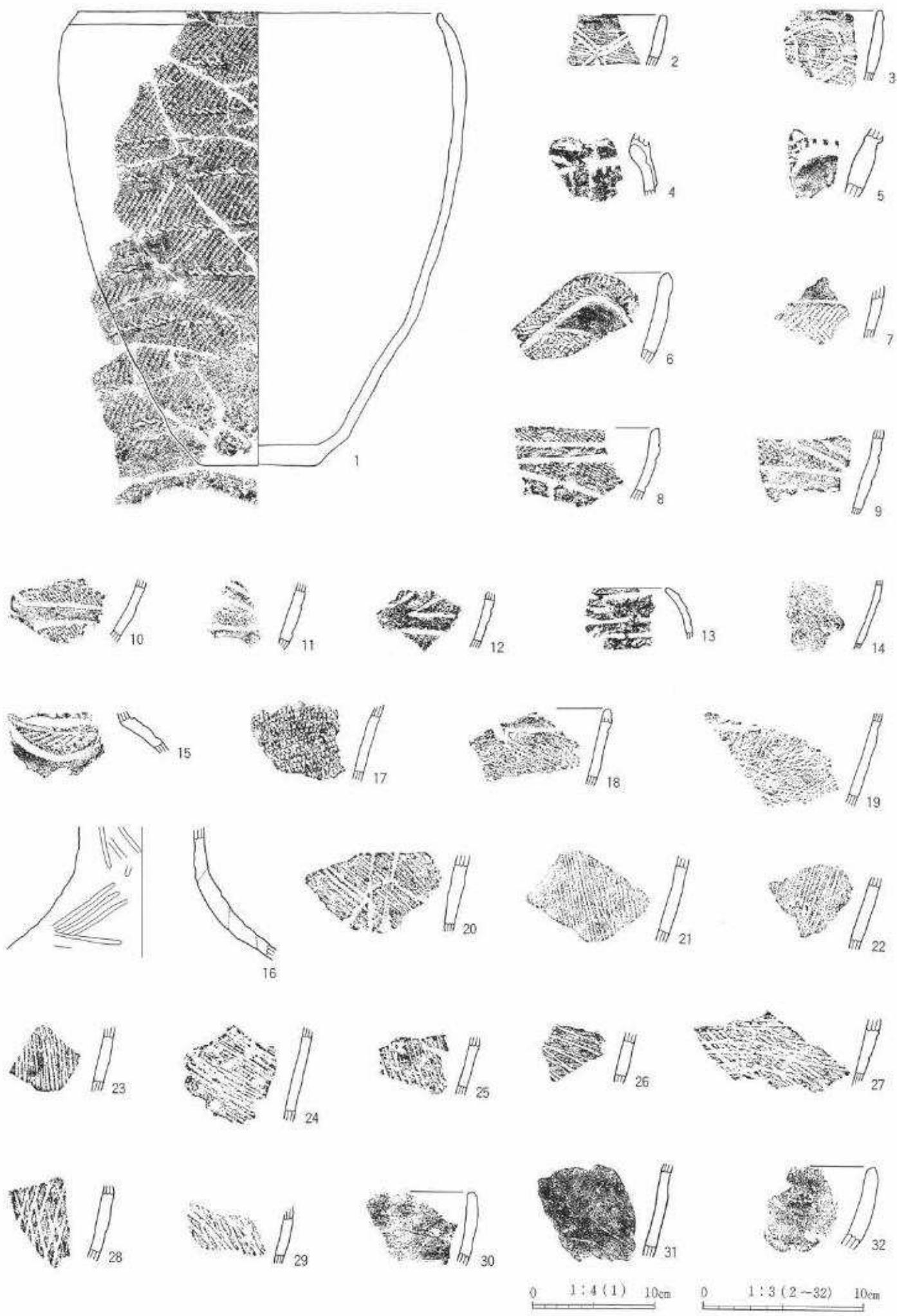
f

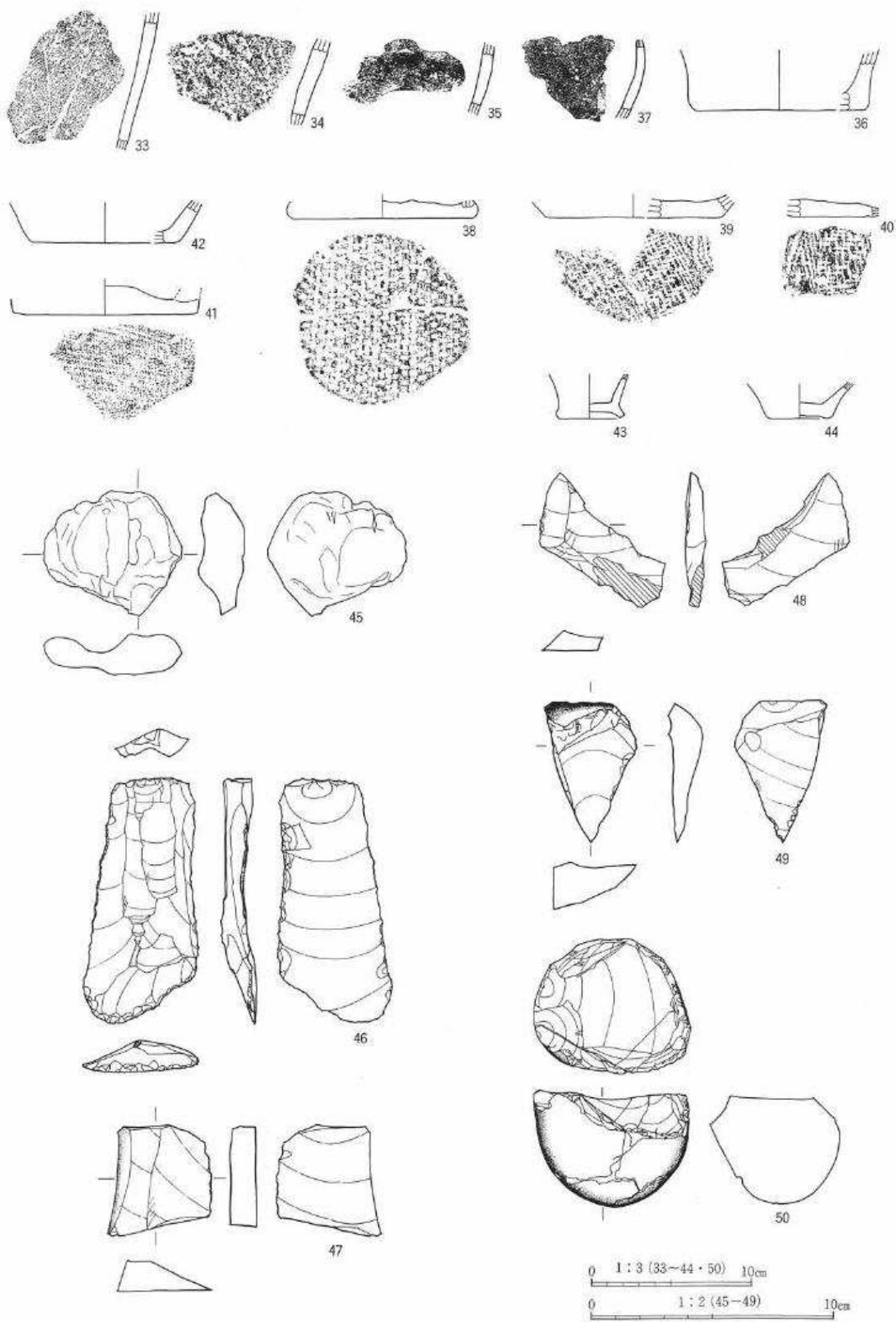
42.0m c

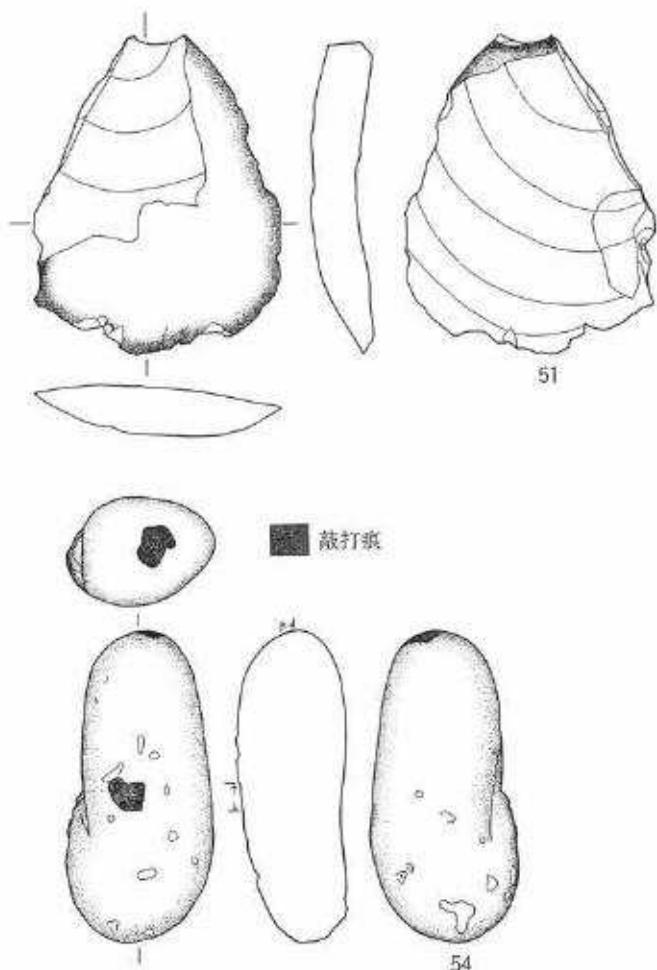
42.0m g

h

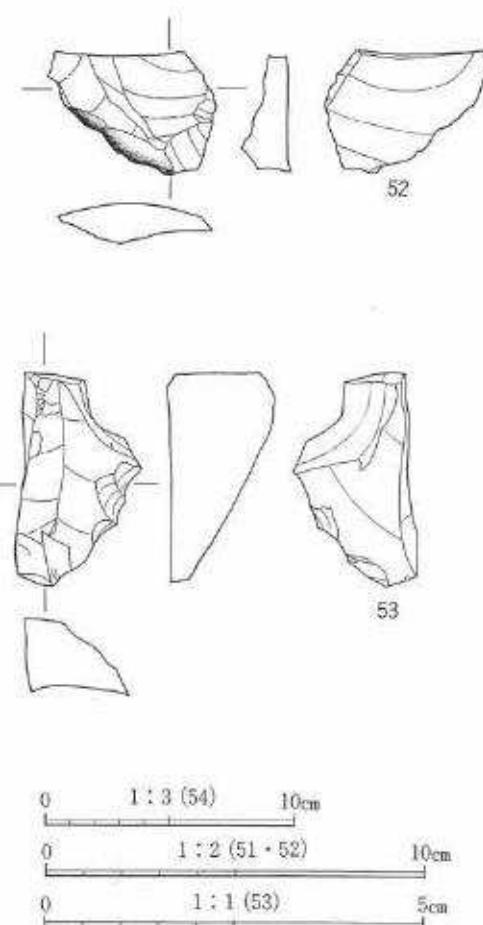
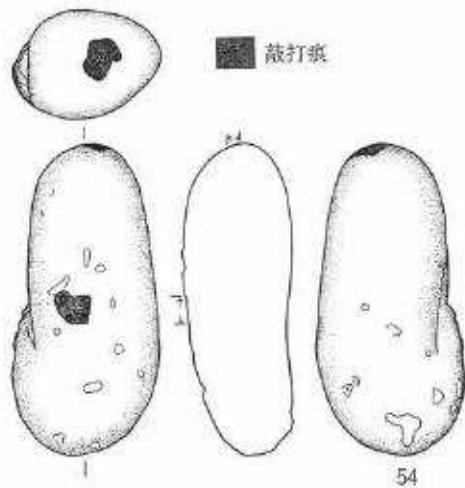








■ 敲打痕





1. 遺跡遠景  
〔南から〕

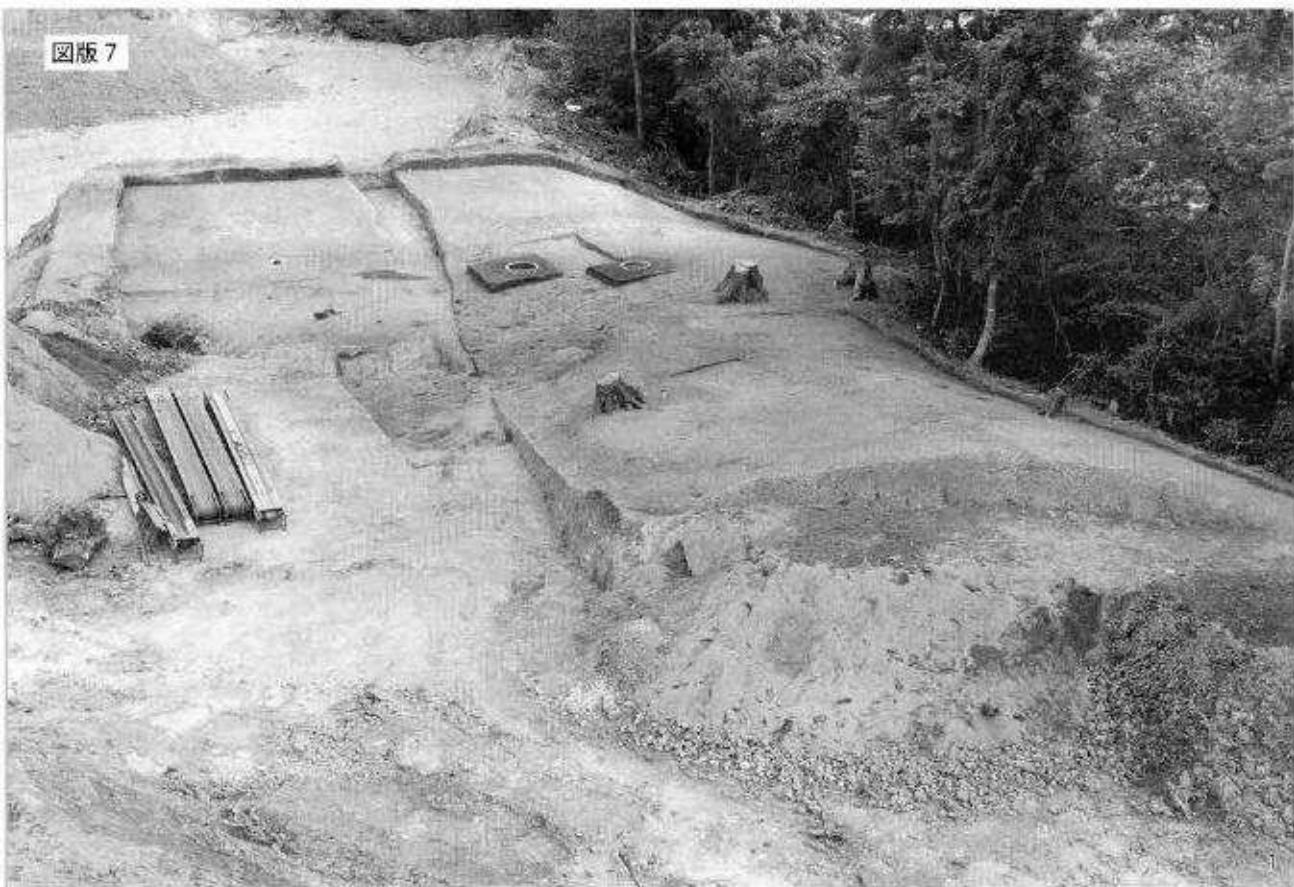


2. 遺跡遠景  
〔北から〕



3・4. 作業風景





1. 遺跡完掘全景  
(南から)

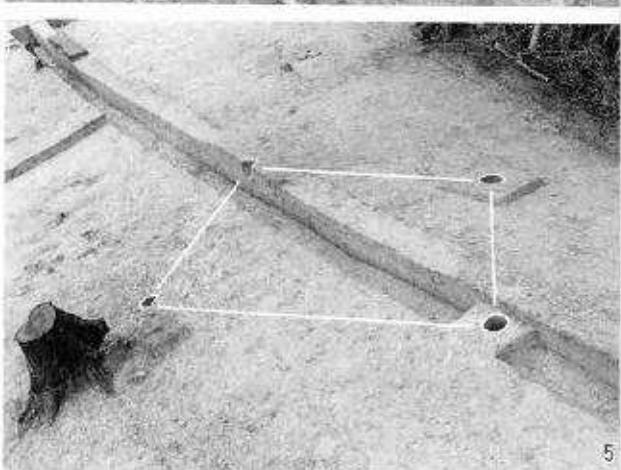
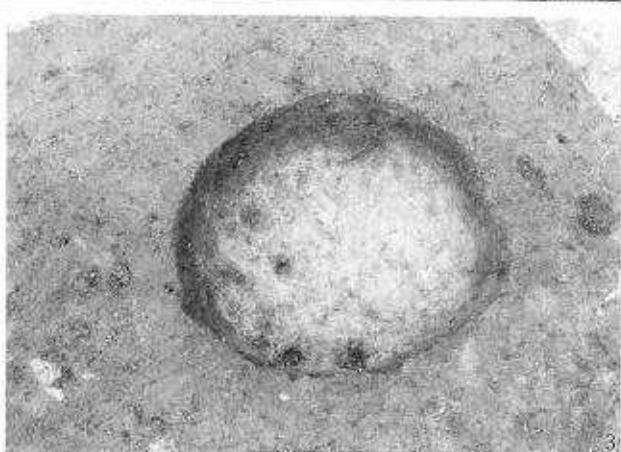
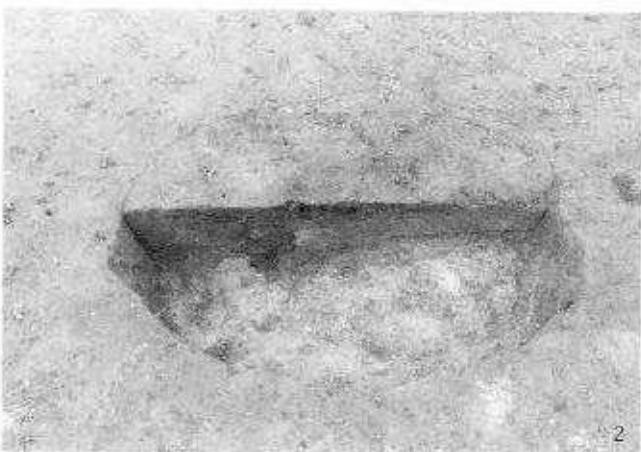


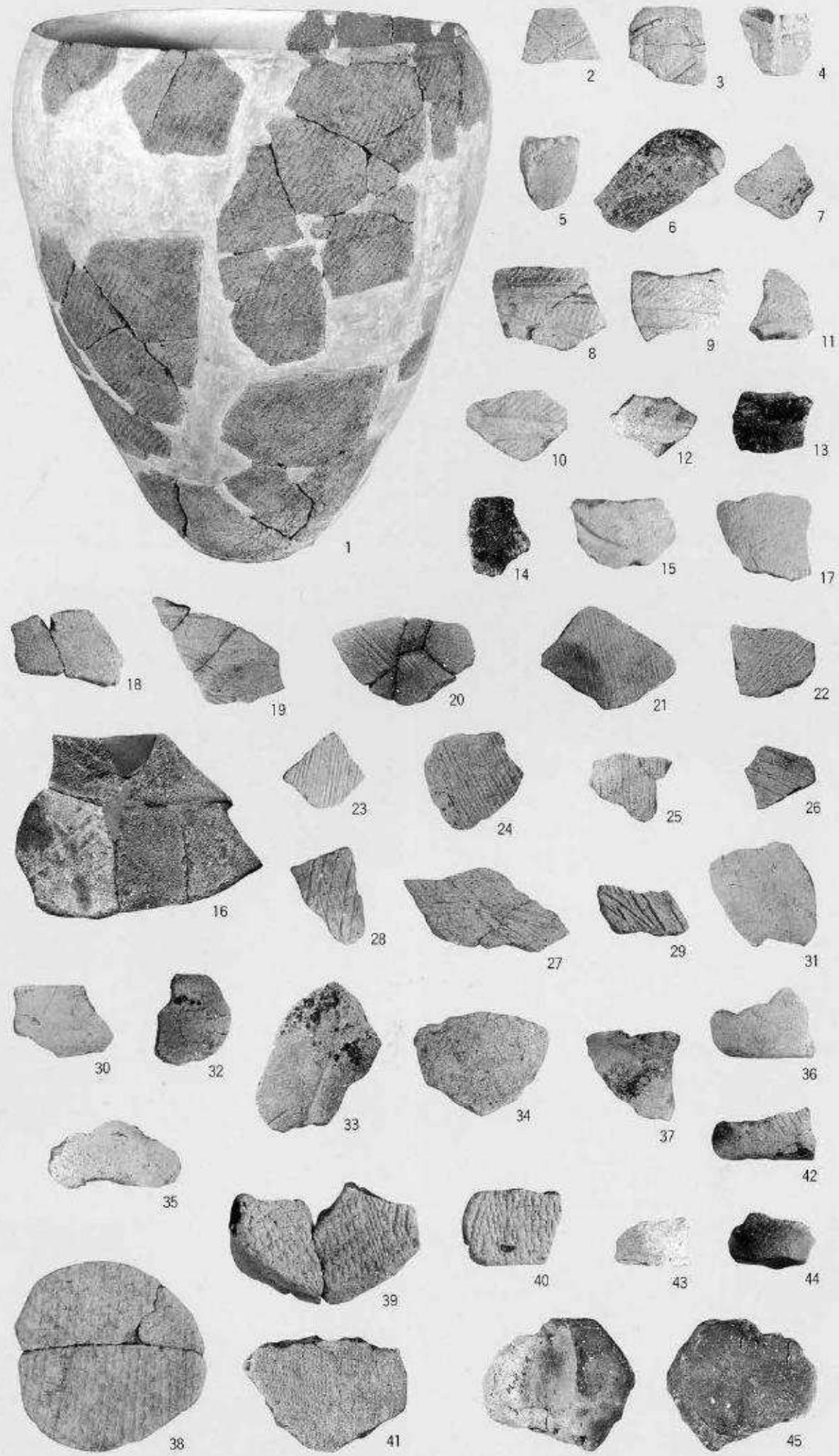
2. 遺跡完掘全景  
(空撮)



3. 1号土坑土層断面  
(東から)

4. 1号土坑完掘  
(南から)

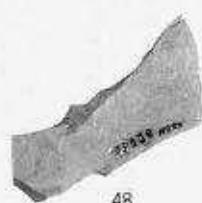




1:4 (1)  
1:3 (2~44)  
1:2 (45)



46



48



49



47



50



54



52



53

1:3 (50:54)

1:2

(46~49・51・52)

1:1 (53)

## 報告書抄録

書名	獅子沢遺跡						
副書名	北陸自動車道関係発掘調査報告書						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第82集						
編著者名	菅井良咲・村山良紀						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL 0250-25-3981						
発行年月日	西暦 1996年12月27日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
獅子沢遺跡	新潟県北蒲原郡安田町 大字六野類字獅子沢	301 100	37度 45分 18秒	139度 15分 49秒	19950912～ 19951003	370	北陸自動車道建設 による土取り
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
獅子沢遺跡	遺物包含地	縄文時代晩期 ～ 弥生時代中期	土坑2基・掘立柱 建物跡 ピット2基	縄文土器・弥生土器・石 器			

## 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第82集

## 北陸自動車道関係発掘調査報告書

## 獅子沢遺跡

平成8年12月25日印刷 発行 新潟県教育委員会  
 平成8年12月27日発行 〒950 新潟市新光町4-1  
 電話 (025) 285-5511  
 財新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956 新津市大字金津93番地1  
 電話 (0250) 25-3981  
 FAX (0250) 25-3986  
 編集 財新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 印刷 長谷川印刷  
 新潟市小針1-11-8  
 電話 (025) 233-0321

頁	位置	誤	正
抄録		所収遺跡	所収遺跡
抄録	北緯	37度45分18秒	37度45分14秒
抄録	東経	139度15分49秒	139度15分50秒